

第一章

『借金を返済し終えても、離しません。あなたは永遠に——私のものです』

低く甘く囁く声に陶然として、彼に全てを委ねた。

永遠だなんて、本当は信じていない。戯れに囁かれた睦言だと分かっている。

おままごとみたいに上っ面だけの幸福だとしても。いつかは終わる関係だとしても。

与えられる甘い快感の沼に沈んでいられたら、それでいい。

——けれど。

私達を繋ぐ糸はあまりにも頼りなく、脆くて。

あつという間に千切れて手元から消えてしまう程度のものなのだと。
私はまだ気づかずにいた。

時刻はもうすぐ二十三時を回ろうかという頃。

いつものようにタピオカミルクティー屋のバックヤードでノートパソコンとにらめっこしていると、ふわり、と紅茶の香りが鼻先をかすめる。

振り向くと、艶のある黒髪をオールバックにまとめて、細身のスーツを身に纏った背の高い男性——紅瀬蝶二さんくぜちようじと目が合った。

「お疲れ様です。そろそろ上がりの時間ではないですか？」

「はい。この日報仕上げたら帰ります」

「次に来た時でも良いんですよ？ 終電の時間もありますし」

「そうですね……でも、もう少しだけ……」

画面を見たまま答えると、すつ、と脇から黒いスマートタグのようなものを差し出された。

手をとめて、蝶二さんの手元に目をやる。

「あの……これは……？」

「ウチの部屋の鍵です。今日から使えるので良かったらどうぞ」

「鍵って……あの、もしかしてこの間行った部屋の……ですか？」

「いえ、あれは寝泊まり用に借りている部屋です。この鍵は私のいわば『本宅』——の鍵といいましょるか」

「えっ……!？」

思わずすつとんきような声を出してしまい、慌てて自分の口を手で塞ぐ。

「あ、あの……どうしてこれを、私に……？」

「一花^{いちか}さん、いつも終電ギリギリまで残っているでしょう？ 土日はともかく、今日のように平日だと、翌日本業の会社へ出勤するのが大変なのではないでしょうか。本宅であればここから近いし、あなたの会社への通勤も便利ですから」

「い、いいんですか……？ 私みたいな一般人を、『本宅』に入れてしまつて……」

「ええ。あなたなら……私の全てをさらけ出しても良いと、思つていますから」

耳元で甘く囁かれて、頬が熱くなる。

（ど、どうしよう……そんなこと言われたら、嬉しくなっちゃう……

）

「勿論、無理にとはいいませんが……」

「い、いえっ。ぜひ……お世話になりたいです！」

「良かった。必要なものがあつたら教えてください。用意しておきますから」

「だ、大丈夫です。この辺りなら二十四時間営業のドラッグストアもありますし……」

「あなたにはいつもお世話になっていのですから、これくらいさせてください。……それに……」

蝶二さんの唇が、耳たぶに触れる。

「私はあなたが溺れるほどに……目一杯甘やかしたいと思っています」

「……………っっ♡」

（だ、だめっ……♡息が耳にかかってっ……♡ゾクゾクしちゃう……♡）

「——では、お待ちしていますよ」

蝶二さんがゆっくりと身を離し、口元に意味深な笑みを浮かべる。

それが何を現すか、言葉にせずとも理解出来てしまっ……下半身がずくん♡と疼く。

「これから外出するので出先から帰ります。申し訳ありませんが、締めをお願いします」

蝶二さんがドアを開け出て行こうとすると、金髪を逆立て、筋肉質

の身体に派手な刺繍を施したスタジアンを羽織った、いかにもといった風体の男性がぬつと顔を出した。

（お、大きい……！）

蝶二さんも背が高い方だが、彼はさらに頭一つ分くらいの高さがある。

もしかしたら二メートルくらいあるかもしれない。

「……」

ゆらり、と男性が首を傾けて私をじつと見つめる。

厚ぼつたいまぶたに半分以上覆われた目からは、私を値踏みするような視線を感じて身が竦む。

（な、なんでこんなに睨まれてるんだろう……）

「獅鞍^{ししくら}。外で待っていると言ったはずです」

蝶二さんが冷ややかな視線を男性——獅鞍さんへ向ける。獅鞍さんは僅かに顔をこわばらせ、ほぼ直角に頭を下げた。

「失礼いたしました。紅瀬さんが出てくるのが遅かったので、もしかあったのかと心配になりました」

「……『待て』が出来ない犬に躡けた覚えはありませんが？」

蝶二さんの視線が鋭さを帯びる。

見ているこちらまでゾツとするような酷薄さを湛えていて、思わずぶるつと身体が震えてしまった。

「……も、申し訳ありません……」

巨体を目一杯縮こまらせて、獅鞍さんが深々と頭を下げる。まるで猛獣使いに鞭を振るわれた獰猛なライオンのようだ。

「次からは、気をつけてくださいいね？　では一花さん。あとはよろし

くお願いします」

肩越しに向ける彼の笑顔は、いつもの穏やかなものに戻っていて。その落差が更に、背中をひやりとさせたのだった。

（こ、怖かった……！）

二人がいなくなつた後、机に突つ伏して大きく息を吐く。

あんな蝶二さんは初めて見た。

（……最近はあまり意識してなかったけど……蝶二さんってやつぱり極道の人、なんだよね……）

彼と、初めて会った時のことを思い出す。

物腰は柔らかいけれど、威圧感に満ちた蝶二さんのたたずまいは私が抱いている「インテリヤクザ」のイメージそのまま。

風俗どころか海外に売り飛ばされてもおかしくなれないと思ってたつけ。
(それがまさか……こんな関係になるなんてね……)

——数ヶ月前。

同棲していた恋人の玲音^{れおん}が勝手に私の実印を持ち出し、闇金から多額の借金をしていたことが発覚した。

債権者の一人として、私の前に現れたのが、消費者金融『バタフライファイナンス』を営む蝶二さんだった。

「三百万円、今すぐ耳揃えて返していただけませんか？」
状況を聞いて絶望した私に持ちかけられた条件。

それは【彼の経営するタピオカミルクティー屋で働き、給料から借金を月々返済する】こと。

昼間は本職である一般企業での総務の仕事をこなしながら、週三日ほどタピオカミルクティー屋でバックオフィスの仕事をこなす日々。そしてもうひとつ、私の特別な『お仕事』は——彼の【抱き枕】になること。

タピオカミルクティー屋での仕事を終えた後、癒し担当としてソファで眠る彼に抱きしめられ……そして、セックスをする。

セックスは私から提案した【追加業務】だった。

玲音の負債を肩代わりしてくれた蝶二さんへの、せめてもの奉仕——というのは建前で。

お互いに身体を重ねる言い訳が欲しかっただけ。

けれど気がつく、私は蝶二さんとのセックスにすっかり溺れてしまっている……

そして彼も私と離れがたいと言ってくれた。

私に借金を押しつけておいて、更に金ヅルとして利用し続けようとする玲音に一泡吹かせるために、蝶二さんとのセックスを見せつけそのまま別れを告げた。

それから数ヶ月経った今も、蝶二さんとの関係は続いている。

「あなたのよわよわ雑魚ちゃんぼとのセックスは、もうすっかり上書きされてしまいましたよ。もう、彼女は永遠に私のモノです。——二度と、私のちゃんぽケースに手を出さないでくださいね？」

「♡♡♡ それってっ、わ、私をずっと♡そばに置いてくれるっ

てことですか？」

「ええ。借金を返済し終えても、離しません。あなたは永遠に——私のもんです」

玲音の前で蝶二さんははっきりと宣言してくれた。

二千万円という、途方もない金額。

あの日突きつけられた数字を思い出すと、今でも背筋が寒くなる。それを蝶二さんがすべて肩代わりしてくれた。

正直、あとどれくらい残っているのか把握できていない。

返済計画について尋ねても、蝶二さんは「気にしないでいい」と笑うばかりで、はぐらかされてしまう。

けれど……あくまで私は彼の「ちんぽケース」であり「恋人」ではない。

そこは割り切っているつもりだけれど……

（こんなことされると、期待しちゃうよね……）

私はそつとタグキーをつまみ、バッグにつけているパズケースの中へと差しこんだ。

「えつと……確かこっちの方……みたいだけど」

お店の締めを終え、退勤した後。

ホストのキャッチやガールズバーの看板を持った女の子たちがたむろす繁華街を抜けて、スマホを片手に彼の住むマンションへと向かう。

蝶二さんがメッセーシアプリへ送ってくれたマップの通りに進んでいくと、立ち並ぶ高層ビル群よりひとときわ高いタワーマンションが見えてきた。

（も、もしかしてあれが……蝶二さんの……？）

立ち止まり、彼からのメッセージに記載されたマンション名とタワーマンションの入り口に刻まれたマンション名を見比べる。

一文字違わず同じ。やはりここで合っているようだ。

（まさかこんなすごいところに住んでたなんて……）

以前お邪魔した蝶二さんの部屋は、決して狭くはないがごく普通のマンションだった。

「私はしがない下っ端ヤクザですよ」なんて普段蝶二さんは自嘲気味に話していたし、構えていた事務所やタピオカミルクティー屋もこぢ

んまりとしていたので、その言葉を信じていたのだけれど。

（下っ端がこんなところに……住めるものなの……？）

ヤクザのことなんて何も分からないから、これが一般的な『下っ端ヤクザ』の住居として相応なのかどうかなんて判断がつかないんだけれども。

（と……とりあえず中に入ろう……）

一応「着きました」と蝶二さんにメッセージを送ると、

「……!？」

幾重にも連なった自動ドアの向こうから、蝶二さんがこちらへ歩いてくるのが見えた。

（い、いつの間に!？）

「お疲れ様。早かったですね」

黒いドレープ素材のシャツに細身の黒パンツ姿の蝶二さんは、いつもより少しだけラフに見える。

（スーツ以外の格好見たの、初めてかも……）

いつもはキッチリ首元までボタンを閉めているのに、目の前の彼は第二ボタンまで開けていて。

ちらりと覗く鎖骨が妙に艶っぽくて……ごくり、と喉が鳴ってしまった。

出逢った頃は「イケメンだけど胡散臭い」なんて思ってたくせに。今では透けるような白い肌と、銀色の細いフレームの眼鏡の奥で光るつり目気味の切れ長の瞳や尖った顎、笑みをたたえた薄い唇。すべてが愛おしくてたまらない。

「は……はい。今日はそんなに忙しくなかったので。蝶二さんこそ、

迎えに来るの早かったですね」

「ああ。あなたが店を出たと連絡をくれた後、ずっとロビーのソファで待っていましたから。一刻も早く……あなたに会いたくて」

「……っ♡」

熱を含んだ眼差しを向けられて、きゅんとする。

さっきまでぼんやりと浮かんでいた疑問は、あつという間に頭の隅へと追いやられてしまった。

「さあ、では部屋へ行きましょう」

蝶二さんが私の肩を抱き寄せる。私は彼の胸にしなだれかかり、頷いた。

いくつものセキュリティシステムをくぐり抜け、ようやく最上階の

彼の部屋へとたどり着く。

リビングへ足を踏み入れた瞬間、呆然として立ち尽くしてしまった。
(す、すごい……！ ホテルみたい……！)

和モダンを基調にした内装は、格子の意匠のスライドウォールや上質なファブリックのソファアールが、シンプルながら選り抜かれた高級感を漂わせている。何より印象的なのは、一面に張り巡らされたワイドゥインドウだ。

煌々と灯りが灯る歓楽街が視界いっぱいに飛び込んできて、さながら映画のワンシーンのよう。

リビングというより、もはやラウンジと呼んでも差し支えない。

蝶二さんはリビングを素通りし、さらに続くダイニングゾーンへと向かった。

慌てて彼の後を追うと、キッチンの前でぴたりと止まる。

「適当に座って、待っていてください。今お茶を淹れますから。美味しいスコーンを買ってきたので、一緒に食べましょう」

蝶二さんがキッチンに立ち、電気ケトルで湯を沸かし始めた。

おずおずとダイニングテーブルに腰掛け、ちらちらと部屋の様子を伺う。

ダイニングゾーンは黒とグレーで統一されていて、天井に設えられた埋め込み式のダウンライトのオレンジ色の光りが、柔らかく辺りを照らしている。

高級感溢れるキッチンに立つ蝶二さんの背後には、家電らしきものが見当たらない。

壁一面を占拠する黒いキッチンボードには、瓶に入ったスパイスや

美しいパッケージの紅茶缶がいくつかお行儀良く並んでいるだけだ。
もう、何もかもが私の想像を遥かに超えていて情報処理が追いつかない。

（ここって……家賃いくらするんだろう……）
なんて下世話なことを考えてしまう。

「お待たせしました、どうぞ」
ほどなくして、蝶二さんが戻ってきた。

持っていたトレイを、私の前へ優雅な仕草で置く。

木目が美しい正方形のトレイに、白い陶器のカップとティーコゼを被せたポット、そしてスコーンを載せた白いお皿が美しく並べられている。

スコーンと一緒に、カップに入ったクロテッドクリームといちごジ

ヤムが添えられていて、一部の隙も無い完璧さだ。

「す、すごいですね……！　まるでカフェみたいです」

「ふふ、お褒めに預かり光栄です」

「いただきます」

スコーンを割ってクリームとジャムを塗り、一口囓る。

豊かな風味が口に広がった。

「……すつごく美味しい、です……！」

「良かった。一花さんが甘いものがお好きかどうか分からなかったの
で、心配していたんですが……気に入ってくださったようで安心しま
した」

蝶二さんがほつとしたように口元を緩める。

「そういえば……あまり一緒に食事をしたことはなかったですね」

「ええ。ほぼ事務所で会っていましたしね。ですが……」

蝶二さんが、私の手に自分の手を重ねる。

「これからは……毎日一緒に食事をしましょう。私はあなたと、もつと濃密な時間を過ごしたい」

低く甘い囁きに、ぞくんっ♡と背筋が波打つ。

「た……例えば……？」

「そうですね……一緒に朝食を食べて、共に同じ部屋へ帰って、一緒にベッドで眠る……そんな生活をしたいんです」

「そ、それって、同棲って言うんじゃない……」

「そうかもしれませんが。ともかく……私は一秒でもあなたと共にいたい」

蝶二さんが私の指に自分の指を絡める。

（な、なんだかいつもより接触が濃い……ような……）

「一花さん……私は——」

ヴヅッ、ヴヅッ。

蝶二さんのズボンのポケットに差しこまれていたスマホが震えた。

「……申し訳ない。仕事の連絡のようです」

彼はゆつくりと私から身を離すと、シャツの胸ポケットからスマホを引き抜き、画面をタップした。

「私です。ああ……例の件、ですよ？ 調べはつきましたか？ ……

…なるほど、そうですか、では……」

蝶二さんがチラリと視線を私へ投げる。

ため息をついて椅子から立ち上がると、そのまま部屋を出て行ってしまった。

（……もしかしくなくても、私に聞かれたくなかったのかな）

会話のほとんどは専門用語で私には何の話かさっぱり分からなかったけれど、蝶二さんの反応から察するに、大きな案件なのだろう。

「……」

お店での獅鞍さんと蝶二さんの会話を思い出す。

素人の私から見ても、蝶二さんに対する彼の態度は『下っ端』に向けるものではない。

そして――

「……『待て』が出来ない犬に躡けた覚えはありませんが？」

思い出すだけでぞつとするような、感情の色が全く感じられない無

機質な声と表情。

彼が本当に『下っ端』ならば、あんな虫けらを見るような視線を獅鞍さんに向けられないだろう。

改めて私が見ている蝶二さんは、彼を構成する要素の一部に過ぎないのだと思い知らされる。

(……本当の顔を見てしまつたら……どうなるんだろう?)

紅茶をちびちびと飲みながら考える。

私たちの関係はひどく曖昧で、名前をつけることすら躊躇うほどだ。お店のバックヤードで会話を交わし、ソファで身体を重ねて別れる。店を出てしまえば、次の仕事の日まで会うこともない。連絡先も知らない。

強いて言えば「セフレ」が一番近いのだろうか？

それにしては、私は蝶二さんに依存しすぎている気がするし……
やはり彼の言う「おまんこペット」が一番しつくりくる。

でも、それでもいいと思っていた。

蝶二さんはヤクザで、違う世界の人だから。

ただの一般人の私なんて飽きて、いつかあつさり捨てられるの
だろうと覚悟していたし。

けれど――

「あなたなら……私の全てをさらけ出しても良いと、思っていますか

ら」

（あんなこと言われたら……勘違いしちゃうよ）

他人には隠しているのであろう『本宅』に通されて、共に時間を過ごすことは彼の内側に入れてもらえたようで。

踏み込むことを許してもらえたと許しを貰えたようで。

「おまんこペット」以上の関係へと一歩踏み出しても良いのではないかなんて、分不相応な期待をしてしまう。

さつき一緒にスコーンを食べていた時の彼の態度も、いつもよりやけに熱っぽかった気がするし。

（そういえば……電話が来る前に何か言いかけてた気がするけど……なんだったんだろう？）

ガチャッ。

扉が開き、はっと意識が現実へ呼び戻される。

蝶二さんが広いラウンジリビングを横切り、私が座っているダイニングテーブルへと近付いてきた。

「お待たせしてしまい申し訳ありません。少し込み入った話だったもので」

「いえ……大丈夫です」

ふと、蝶二さんの視線が空のティーカップに吸い寄せられる。

「紅茶、良かったらお代わりをお注ぎしましょうか？」

「はい。ぜひいただきます」

蝶二さんがカップを手に取り、ティーコゼを外したポットを高く掲げてなみなみと紅茶を注いでくれる。

無駄のない流れるような美しい所作に、思わず見とれてしまった。
私の視線に気づいた蝶二さんが手を止め、こちらを見る。

「……どうされました？」

「あ……すみません。じろじろ見てしまつて。なんだか、執事みたいだなー……なんて」

「……執事？」

「えつと、なんて言つていいか……すごく……かつこいい、です」

「……そんなことを言われたのは、初めてですね」

困惑したように、蝶二さんが眉根を寄せる。

わずかに目の縁が赤くなっていることに気づく。

（もしかして照れて……る……？）

こんな顔、初めて見た。なんだか……可愛いかも。

（どうしよう……触りたい……）

手を伸ばしかけて、引つ込める。

今の蝶二さんへ不用意に触れるのは、なんだかいけない気がする。

（いつも、もつとすごいことしてるのに……）

「……今、どうして手を引つ込めたんです？」

「あ……っ」

彼の骨張った指が、手首を捉える。

「き……気づいてたんですか？」

「ええ。私の頬に触れようとしていましたね。そのまま撫でてくれるのではないかと期待……していたのですが」

「……っ……許可なく触るのは、失礼かなって思って……」

「そんな気遣いは無用なのに。私とあなたの仲なので、遠慮な

んてしないでください」

掴んだ手を自分の唇へ引き寄せ、蝶二さんがちゅ……♡と手の甲へ口づけた。

「え……っ♡あ……っ♡」

指を絡められ、滑らかなカーブを描いた頬へ誘導され、強引に触れさせられる。

「ほら……こうやって……触りたい時は好きなだけ触ってくださいっていいんですよ？」

「ちよ、蝶二さ……♡なんか、これ……ダメ……です……っ♡」

「ふふ……そんな蕩けた顔をしておいて『ダメ』はないでしょう」

ちゅ……ちゅっ……♡

まるで壊れ物を扱うかのように、彼の唇が柔らかく指先へ吸い着く。

「知っていますか？ 指には神経が集まっていて……とても感じやすい場所なんですよ」

ちゅ……♡ちゅぷ、ちゅぷ……♡れろ……♡れろろお……♡

ねっとり♡と薄い舌が指に絡みつき、ちろちろと舐め回す。

ただそれだけなのに……

（なんでこんなに……♡ぞくぞくしちゃうの……っ♡）

「ふふ……口元がふやけていますよ？ もしかして……発情していますか？」

上目遣いで見つめられ、今度はずくん♡とお腹の底が疼く。

「だ……だって……っ♡蝶二さんがそんな……えっちな顔、するから

……♡」

「私はもう……あなたに欲情していますから……ん……っ……。こう

して……ちゅぷっ……♡あなたの小さく可愛らしい指をしゃぶつていと……とても背徳的な気分になる……ちゅっ……♡」

ぬるり……♡と温かな口内粘膜に指を包まれて、首筋からぞわぞわと甘い痺れが生まれてお尻の付け根まで落ちてゆく。

指を口蓋に押しつけてぢゅぽぢゅぽ♡と扱かれると、まるでクリトリスを愛撫されている時みたいに、おまんこがきゅうう……♡と切なく窄まってしまう。

（あああ……だめえ……いつも……クリしゃぶられてる時のこと、思い出しちゃう……っ♡）

官能を呼び覚まされて、ついもぞもぞとお尻が動いてしまう。

ちゅぽん……♡

蝶二さんの唇から、不意に指が引き抜かれた。

指先からつう……♡と唾液が垂れて、蜘蛛の糸のように細く彼の唇と繋がる。

「……そんなにいやらしい顔をされては、困ってしまいますね。抑えが効かなくなる」

「……くっ……♡分かってて、やったくせに……♡意地悪、ですね」

「さすが一花さん。全てお見通しでしたか。では……隠す必要もありませんね」

蝶二さんが髪を掻き上げ、淫蕩な笑みを漏らす。

「続きは……寝室でしましょう」

「……はい……♡」

「……っは……ん……あ……っ……♡」

暗がりの中、間接照明がかすかに辺りを照らす。

二人には広すぎるほどのキングサイズのベッドへ倒れ込んだ途端、貪るように口づけあい、あっという間に服を脱がされ裸で絡み合う。

互いに欲情を高め合うのに、さほど時間はかからなかった。

「……っ……は……♡んむ……♡れろ……れろお……♡」

ベッドへ仰向けに寝転がった蝶二さんの上へ裸で跨がり、既にそそり勃つたペニスの先端をちろちろと舐める。

（あ……♡むわっと牡の匂いが立ち上って……♡ああダメ、この匂いだけでイッちゃいそう……♡）

蝶二さんは覆い被さる私の尻肉に指を食い込ませ、むきい♡と左右に割り開いた。

「指を舐めただけで、こんなにびしょびしょに濡らして……まったく、あなたという人は堪え性がなさすぎる」

「う……♡ごめんなさ……ん……ちゅ……ちゅぶ……♡」

「メスの匂いがふんぷんしますよ。いつもより濃いんじゃないですか？」

ふう……♡と鼻息がおまんこにかかり、ふるりと腰が震える。

「あ……♡だ、だめ……♡っ♡匂い、嗅がないで……♡」

「あなたこそ、私のちんぽの匂いを吸い込んでいたじゃないですか。自分だけ堪能しようとするなんて、不公平ではないですか？」

「そ、そんな……ふぁ……♡っ♡」

クリトリスに鼻を押しつけられて、すり……♡すり……♡と擦られる。

すでに痛いくらいに勃ち上がっている肉芽は、緩やかな刺激でいつも簡単に快感を得てしまう。

「だ……だめ……♡い、今っ、クリっ♡こすこすしたら……♡おちんぽに、集中できな……っ♡」

「頑張ってイカせてください？ 私はその間……このぐちよぬれまんこをじっくり味わいますから……」

ちゅぷ……♡れろれろ……ちゅぱ……♡ちゅぱ♡

真っ赤に熟れた淫裂を指がくつと割開き、長く薄い舌が淫裂を這い回る。

ぞろろろくと陰唇の周りをなぞられてひくり、と腰が震えた。

「っあ……♡」

「おまんこをこんなに真っ赤に腫らして、濃い汁を滴らせて……もし

かしてずっと、発情していたのではないですか？」

「そ……そんなことない……です……っ……ん……ちゅ……っ……♡」

張り詰めた肉幹の裏筋にべったりと舌を貼り付け、れろお……♡と舐め上げる。

僅かに蝶二さんがびくっ、と腰を震わせた。

「蝶二さん……だってっ……♡ずっとおちんぽひくひくさせてるじゃないですか……♡」

「ふふ……あなたのフェラテクがずいぶんと上達したので、感心していたんですよ。初めの頃は私にクリトリスを突かただけで可愛らしく感じていたというのに……♡」

「だって……っ♡蝶二さんに鍛えられた……のでえ……♡」

「生半可な愛撫ではあなたをイカせられない……ということですね。では、私も本気を出させて貰いますよ」

ぢゅろおおお♡ぢゅぱっ♡ぢゅぱっ♡

重なり合った花芯をめくられ、直に媚肉をしゃぶられる。

指をしゃぶられた時とは違う、内側を直に舐め回される感覚がお腹の中へ響いて。

まるで誘われるようにふり……♡ふり……♡とはしたなくお尻が揺れてしまう。

皮を押し上げてぷっくり♡と膨らみきった肉芽を空いた手で挟んで摘まみ上げられると、きゅううんっ♡とお腹の底が強く絞れてくる。

「や……あっ♡クリとおまんこ、同時責めなんてっ♡卑怯です……っ♡」

「使えるものはなんでも使うのが私の流儀だと——前にも言ったでしょう？」

ちこ♡ちこ♡ちこ♡ちこ♡ちこ♡ちこ♡ちこ♡

指腹で押し潰したクリを上下に激しく擦り立てられる。

ぐちゃぐちゃと胎内を舐めしゃぶられる愉悦とぶつかりあって、あつという間に高みに達してしまった。

「いっ……はっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

「ん……っ♡おまんこぎゅうぎゅう締まってますね。舌が千切れそうだ……♡イキそうなんでしょう？ イクときはどうすればいいか……分かってますね？」

「はひっ♡蝶二さんにつ♡ちゃんとアクメ報告っ♡しましゅっ♡」

「ふふ、いい子だ。さあ……思いきりイキなさい」

「っあ♡イク♡イク♡いきましゅうう♡あっ♡あっ♡あっ♡あぁあ
あぁあぁあぁ〜♡」

ふぢゅっ♡

昂ぶりが最高潮に達し、ぴゅう♡と愛液が小さくしぶいてしまう。

「あ……っ♡ごめんなさい……♡蝶二さんの、顔を……汚してしまっ
て……っ♡」

「本当に……いけない子ですね。少し、仕置きが必要なようです」
蝶二さんがぺろり、と顔にかかった蜜を舌で舐め取る。

そんな仕草すら妖艶で、ぞくん♡と背筋に甘い衝撃が走った。

「四つん這いになって、私へおまんこを差し出しなさい」

「は……はいっ……♡」

言われた通りに四つん這いになり、くいつとお尻を高く突き出す。

「確認しておきますが……ピルは飲んでいますね？」

「はいっ♡だから今日も……ナカ出しで、お願いします……♡」

お尻に手をかけ、くばぁ……♡とおまんこを割り開く。

肩越しに振り返り、淫らに蕩けきった視線を蝶二さんへ向けた。

「だから……この浅ましく欲しがりな発情メスまんこに……蝶二さんのぶつといおちんぽをぶちこんで……めちやくちやに犯してください……♡」

鼻に抜けそうな、とびきり甘ったるい声でおねだりをする。

蝶二さんは唇を歪め、蔑むような眼差しで私を見下ろした。

「よくもまあ……恥ずかしげもなくぺらぺらと卑猥な言葉を口に出れますね。そんなにこのちんぽが欲しいんですか？」

「ほしい……ですっ♡蝶二さんのっ♡血管びきびきのっ♡反り返った

おちんぽっ♡

「まるで盛りのついた牝犬ですね……ですが、すぐに与えられるとは思わないでください？」

びたんっ♡

ぐずぐずに蕩けたおまんこへ、パンパンに張り詰めた怒張がたたき付けられる。

「ひぁ……っ♡」

びたんっ♡びたんっ♡

「うぁ♡なんでっ♡すぐにつ♡挿れてくれないんですかぁ……っ♡」
「言ったでしょう？ お仕置きをします。すぐに挿れてしまつては、あなたを悦ばせるだけですから……」

（おちんぽビンタっ♡子宮に響くう♡どうしよう♡これはこれで、き

もちい……かもお……♡)

「っあ♡ひんっ♡ひんっ♡ひんっ♡」

腰を突き出し、ぬめった肉溝へたたき付けられる剛直を擦りつけてへこへこと浅ましく擦り立てる。

浮き立った血管でクリが擦られてっ♡じんじんあつついのがお腹の底に響いてくるっ♡

「自分からちんぽを誘い込もうとして……いじましいおまんこですね」

蝶二さんがくつと呆れたような笑みを漏らした。

(ああ♡呆れられてるっ♡やだっ♡これええ♡興奮するう♡)

美しい所作で私のために紅茶を注いでくれた蝶二さんの姿が脳裏をよぎる。

普段は蕩けるような甘い言葉を囁いて、執事みたいに私に傳いてくれるのに。

セックスの時は嘲るような冷ややかな眼差しで見下ろして、壊れるくらいに抱き潰す。

私のマゾ性を見抜いて、巧みにコントロールしているのだろう。

まさに『飼われている』のだという実感が湧いて——ゾクゾクする。

「このままでは、勝手にまんこにちんぽを食べられてしまいそうだし、仕方ない……挿れてさしあげますよ」

蝶二さんの指先が私の尻肉に食い込み、くばあ……♡とおまんこを割開く。

そして——

ず……ぶうううううう♡

「~~~~~……ッ♡♡♡お……お……♡~~~~~……ッ♡♡♡」

極太ちゃんぽがみぢみぢと肉襷を搔き分けて中へ入って来る。

強烈な圧迫感と共に、じいじいん……♡とお腹の底へ法悦が響き渡った。

（ああああ♡きたっ♡待ちわびてた極太バキバキちゃんぽ♡おまんこの奥までぶちこまれちゃったああ♡）

ず……ふんっ♡♡♡ずぐっ♡ずぐっ♡♡♡

細身のしなやかな身体から繰り出されるとは思えないほどの重たいピストンで、ぞくんっ♡ぞくんっ♡と寒氣じみた痺れが腰にまわりつく。

身体の内側がうねって、もつと奥まで貫いてほしいと貪欲に肉棒へしゃぶりついているのが分かる。

「ふ……ずいぶんとガッツいていますね。もしかしてずっと……私のちんぽのことばかり考えていたんじゃないですか？」

「そんなこと♡にゃい♡れしゅ♡らっていきなり♡こんな♡♡かきまわされたらあ……♡誰だって……♡♡」

「自分の雑魚まんこぶりを一般論に置き換えるのは感心しませんね。ご自分がちんぽ大好きなマゾメスだと自覚するべきです」

ぱん♡♡ぱん♡♡ぱん♡♡ぱん♡♡

お尻に股間をたたき付けられ、身体が大きく弾む。

Gスポットをぞり♡♡ぞり♡♡とカリの段差で挟られ、ぐにぐにと裏から押し上げられて、ずくん♡ずくん♡とお腹の底が淫らに疼く。

（だめええ♡これ♡♡きもち♡い♡い♡ぎ♡だ♡い♡♡このまま♡い♡い♡だ♡い♡い♡♡）

「はっへっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡………♡♡♡♡」

一瞬意識が飛びかけて、枕に顔押しつけ腹ばいになる。甘く達しかけて、このまま終われたら幸せかも……なんて浸っていたら、

「まだ終わりではありませんよ？」

がっ！ と下乳に腕を回され繋がったままぐうぐうと持ち上げられる。

「ひ………いいいい………♡♡♡♡」

ごっちゅ♡ごっちゅ♡ごっちゅ♡ごっちゅ♡

身体をがっちりホルドされて持ち上げられたまま、オナホみたいにおまんこをずぼずぼ巨根でほじられる♡

膝が浮き上がって♡Gスポぞりぞり決られて♡

子宮どちゅどちゅ押し上げられて♡圧迫感で苦しいの♡ふわ

ふわぞわぞわが止まらなくて♡身体感覚が全部快感に置き換えられていくみたい♡

「なんてだらしない顔をしているんですか？ 目を剥いて口から涎をだらだら垂れ流して……胸まで涎が垂れていますよ？」

「ごめんなひやいつ♡締めまりがない顔とおまんこでごめんなひやいつ♡」

「クリが更に勃起して、ちんぽみたいに膨れあがつてるじゃないですか……そんなはしたないクリに騎けた覚えはありませんよ？」

「ひんっ♡」

肋骨辺りにかかっていた腕が離れ、今度は皮の中でむっちむちに張り詰めた肉芽をぴんっ♡ぴんっ♡と下から弾く。

勝手に身体がしなって、びくんっ♡びくんっ♡と感電したみたいに

大きく上下に揺れる。

「いつ♡今クリいいいつ♡ぴんぴんしたらあ♡だめ♡いぐ♡♡すぐ
イツぢやうがらああああ♡」

「まったく……とんでもない雑魚まんこですね？　まだイツてはだめ
ですよ？」

かりかり……ぴん♡ぴん♡

淫核を絶え間なく爪で引つかかれ、お腹の内側にこみ上げるむずが
ゆい愉悅に耐えかねてがくと身体が前のめりに傾く。

蝶二さんがベッドに肘をついて倒れ込んだ私の身体に覆い被さり、
今度はぎゅうううつと乳房を強く握りしめてきた。

「……い……た……♡おっぱい、千切れちゃうう……♡」

「ねじ切るくらい強く揉みしだかれるのが好きなんでしょう？　おま

んこぐねぐねうねってちんぽにしゃぶりついてきますよ？」

「だって……ええ……あゝ………ッ♡」

絡みつく肉褌をめくり上げながら、ぬろお……とペニスが膣口付近まで引き抜かれる。

ぬ……りゅう……♡ばぢゅんっ♡♡♡

「お——♡………ッ♡♡♡」

一気に秘奥まで貫かれ、背中が弓なりにしなった。

ごりゅ……っ♡どちゅどちゅっ♡ばぢゅっ♡ばぢゅっ♡♡ばぢゅっ♡
短いストロークでねちねちと鋭敏になった。ポルチオをこね回されて、
チカチカと目の裏が明滅する。

子宮のびくびくが止まらない。

絶頂のさらに上へ上へと打ち上げられて、ぶわっと全身に玉のよう

な汗が浮かぶ。

「むりい♡もおむりっ♡ゆるひれっ♡」

頭頂部を枕に擦りつけ、土下座するような姿勢で懇願を繰り返す。
私の身体をすっぽり包むように覆い隠す蝶二さんの肌は汗でしつとりと濡れていて、ひんやりしていて。

むわつと立ち上る牡の香りと、彼がつけている香水の——温かな紅茶のようなベルガモットの香りが混ざり合って、まるで媚薬のように私の官能を煽り立てる。

ああ、このまま脳みそまでどろどろに蕩けてしまえたらいいのに。

快樂だけを摂取して生きていけたら良いのに。

心なんて要らない。身体だけになりたい。そうしたら——これ以上何も求めずにいられるのに。

「あなたのおまんこが私のちんぽに完全屈服するまで、許しませんよ？」

「してましょっ♡らってっ♡何度もっ♡いぎまひたしっ♡」

「私のちんぽに、忠誠を誓いますか？」

「ちかいまひゅ♡蝶二さんのおちんぽ以外受け入れませんっ♡わらひはっ♡蝶二さん専用のおちんぽケースれすっ♡」

「ああ……なんて淫らで可愛い……♡あなたは私だけのモノです、ずっと……ずっと……っ！」

ぼぢゅっ♡ぐぢゅぐぢゅぐぢゅ♡ぼぢゅっ♡ぼぢゅっ♡ぼぢゅっ♡ずんっ♡と蝶二さんの下半身が私のお尻を押し潰す。肉楔が腹の奥へのし掛かり、ごぢゅっ♡♡♡ごぢゅっ♡と重たい一撃を秘奥へ食らわせる。

「っお♡おっ♡おおおっ♡らめっ♡こんならめっ♡おかひ……く
なりゅ♡っあ♡♡おほ♡おおおおお………ッ♡」

「っは……♡一花、さん……♡」

蝶二さんが、まるで吸血鬼のように私の首筋へ強く吸い付く。

その瞬間――

「………ッ♡♡♡ひ………ッ♡お………ッ
♡」

どくんっ♡と胎内で肉棒が爆ぜ、粘膜を灼くような熱い迸りを注ぎ
込まれる。

(……っあ♡あっつい……♡)

びくっ♡びくっ♡と激しく痙攣しながら精を吐き出し続ける肉棒が
愛おしくて、おまんこが更にきゅんっ♡と窄まってしまふ。

その度に、甘い愉悅を重ねがけされて——私は何度も達してしまつたのだつた。

二人でくつたりとベッドへ倒れ込み、快感の余韻に浸る。

肌に触れるシーツは柔らかくまきにとろけるような肌触りで、抱かれている蝶二さんの肌の熱と相まって、なんだか温泉にでも入っているかのような心地よさだ。

「今日はゆつくり休んでいただこう……と思つていたのに……結局してしまいましたね」

「ふふ……でも、やつぱり蝶二さんとしないと……落ち着かないので」

「あまり煽らないでください。そういうことを言われると……またし

たくなる」

蝶二さんが私の髪を弄びながらふつ、と微笑む。

ふわふわと夢見心地で頭がぼうつとして……つい、思い浮かんだことを口にしてしまった。

「……そういえば……さっき言いかけたのって……何のことだったんですか？」

「……言いかけていた、とは？」

「……『ずっと一緒にいたい』って話してくれたあと、何か言おうとしてた気がしたので……」

「……なんでも、ありませんよ」

蝶二さんがふつ、と視線を横へ逸らす。まるで『触れてくれるな』と言わんばかりだ。

すつ……と全身の体温が引いていく。

さつきまでふわふわと温かなお湯の中で揺蕩っていたような心地だったのに。

今は爪先まで冷え切っているかのよう。

そんな私とは裏腹に、蝶二さんは眠たげに目をうつすらと閉じている。

「……………すみません、とても眠くて……………ぼうつとしてしまつて……………

このまま……………あなたを抱き枕にしてもいいですか？」

「もちろんです。おやすみなさい」

蝶二さんが、ぎゅつと私へしがみつく。

そして、すぐにすうすうと規則的な寝息をたてはじめた。

(……………聞くんじゃ、なかったかも)

ふと、はじめて蝶二さんとセックスした日のことを思い出す。

——誘ったのは、私からだった。

「も、もつと、色んなところ、触って……ください」

「あのつ、プロの方みたいに上手く出来ないかもしれませんが、色々、出来ますし。わ、私、紅瀬さんと……っ」

「抱き枕」として眠る彼に抱きしめられるだけの日々から脱却したくて、そんな誘いをかけた。

「ずっと、眠ったふりして触れるだけで、我慢していたのに」

「抱きしめて、押し倒して、キスをして、……その先も、全部したく

なつてしまふ」

彼はそう言つて、私を抱いてくれた。

元彼から裏切られた事実と向きあいたくなくて、快樂に溺れようとした。

『借金返済』を盾に、彼とつながり続けた。

けれど、気がついたらお互いに、離れがたくなつて。ずっと一緒にいるのだと思つていたけれど。

（やっぱり……本気なのは私だけ、なのかも）

だったら、どうしてこの部屋へ呼んだんだろう？

本当に私をただの「おまんこペット」だと思つてゐるなら。

いつものように店のバックヤードのソファで抱き合つて、互いの欲望を吐き出せば事足りるはずなのに。

ただの気まぐれにしては、たちが悪すぎる。

(……半端に、踏み込ませないでほしい)

こうやって懷へ入る隙を与えられてしまったら、わきまえるなんてとても出来なくなってしまうから。

「ん……」

蝶二さんの顎が、私の額へ当たる。

すやすやと眠る彼の寝顔はとても無防備で。いつもより幼く見えて。守つてあげたい……なんて思つてしまう。

(なんだかんだで、負けちゃつてるよなあ……)

少しだけ崩れたオールバックの髪を、そつと撫でる。

(……今は、考えないでおこう)

とろとろと深い眠りへ落ちていった。

——翌朝。

目が覚めると蝶二さんの姿は既になかった。

彼が寝ていた場所に手を当ててみるけれど、わずかな温もりすらも残っていない。

時刻は朝六時半。

おそらく、夜が明けた頃にはいなくなっていたのだろう。

(蝶二さんに……おはようって言いたかったな……)

一抹の寂しさを抱きつつ、ベッドを抜けだしリビングへ向かう。

二人がけのダイニングテーブルには、綺麗に整えられた朝食が、ラ

ツプをかけて置かれていた。

『急な用件が入ったので出かけます。仕事、頑張ってくださいね』
端正な字で書かれたメモからは、彼の心遣いが感じられて。きゅつと胸が締め付けられる。

(……後で、お礼のメッセージを入れておこう)

大きく伸びをし、まずは顔でも洗おうと洗面所へ向かった。

「ねえねえ、だいぶヤバイ話聞いちゃったんだけど」

会社について出勤前に休憩室で缶コーヒーを飲んでいると、同僚の由理が切羽詰まった様子で私に顔を寄せてきた。

「え、何、どうしたの？」

「まだ噂レベルの話なんだけど……うちの部署統合されるかもしれない

いつて」

「えっ……!？」

缶コーヒーを飲む手がぴたりと止まる。

由理が辺りの様子を窺いながら、ヒソヒソと小声で囁く。

「ほら、最近 AI で事務効率化とか流行ってるじゃない？　うちも

そういうの導入するみたいでさ。大々的なリストラはしないみたいなんだけど、営業とかに異動させられるかもしれないって」

「そうなんだ……」

「どうせこの先給料上がらなそうだし、転職しようかなと思ってきたんだけど……本格的に考えようかな。一花も早く決めた方がいいかもよ」

「そう……だね……」

考えてもみなかった。

うちの会社は比較的景気に左右されにくい業種で、給料はそんなに高くないけれど、福利厚生が充実していて安定しているから定年まで勤められそうだと思っていたのに

（どうしよう……）

ふと、蝶二さんの顔が脳裏をよぎる。

彼に解決して貰いたいとは思っていないけれど……この不安な気持ちを受け止めて欲しい。

……甘えているのかもしれないけど。

（今日はお店に出勤する日だし、時間があれば話してみようかな）

飲みかけの缶コーヒーに口をつける。甘味料の甘ったるい味に混じって、少しだけ苦味が強くなったような気がした。

退勤後、そのまま電車に乗ってタピオカミルクティー屋が入っている雑居ビルへと向かう。

従業員通用口からスタッフルームへ向かい、いつものようにドアを開けようとすると、

「……だアから甘いつていうンスよ」
低くしゃがれた声が聞こえてきた。

（この声……獅鞍さん……？）

この間、店に来た男性のことを思い出す。

また蝶二さんに何か用事があるんだろうか？

（うう……なんとなく入りづらいな……）

大事な話だったら邪魔をしてはいけないし、獅鞍さんが出てくるま

でここで様子を見た方がいいのかも。

「カシラ、いい加減こんなショボイ店は若い衆でも任せたらどうです？ どうせたいしたシノギになつてないでしょ」

「立地もいいし売り上げはそれなりに立っている。オヤジもこのまま続けて問題ないと太鼓判を押してくださいましたよ。フロントビジネスとしては立派な結果を出していると思いますか？」

（カシラ？ 蝶二さんのこと？）

この間は「紅瀬さん」と呼んでいた気がする。もしかして、私の手前気を遣っていたのだろうか。

（じゃあ……蝶二さんは若頭……なの？）

頭の中がぐちゃぐちゃで思考がまとまらない。喉がからからに渴いて、引きつれそうだ。

獅鞍さんは納得いかないようで「だアから、そうじゃなくて——」

と何度も噛みつき、それを蝶二さんがやんわりと諫める。

しばらく言い合いが続いた後、獅鞍さんが苛立ったように言った。

「……あの女が原因ですか？」

「……だとしたら、なんだと言うんです？」

「カシウらしくないですよ。カタギの女が珍しいからのめりこんでるだけでしょ？ いい加減目を醒まして戻ってきてくださいよ。アンタはこんなところにいるべきじゃない」

ガンッ！

何かを蹴り倒すような大きな音が響き、反射的にビクツと身をすくめてしまった。

「……口出しは無用と言ったはずですよ」

獅鞍さんがはっと息を呑む気配が伝わって来た。

「……………も、申し訳ありません」

「心配せずとも、彼女の件についてはいずれカタをつけます。……近いうちに」

「……………！」

がくん、とその場に崩れ落ちそうになっちゃった

（カタをつけるって……………終わらせる……………ってこと、だよね……………）

頭の中が真っ白になって、二人の会話が耳に入らない。

よろよろと立ち上がり、その場を離れた。

ビルの裏手に回り、壁に身体を預ける。

呼吸が浅い。うまく息が吸えない。頭がガンガンして、耳鳴りがわ

んわんと響く。

（やっぱり私は『ペット』だったんだ）

理解しているつもりだった。

いつかは飽きて捨てられる存在なのだと、一線を引いていたつもりだった。

でも、心のどこかで甘い希望を抱いていたのかもしれない。

もしかしたら、蝶二さんも本気で私を愛してくれているかもしれないと。

（私は……蝶二さんに甘えすぎてたんだ……）

部屋に招き入れられて、一緒にお茶を飲んで。ベッドで共に眠って。彼の領域に踏み込めたことで、ずっと傍にいられるものと勝手に勝手に思っていた。

きつと彼にとっては一時の気まぐれだったのだろう。

「うう……」

喉から絞り出すようなうめき声をあげてうずくまる。

どうして私は、いつもこうなんだろう。

玲音に借金を背負わされたと気づいた時のことを思い出す。

なんでこんなことになっちゃったんだろう。

なんで私はいつも、誰にも愛してもらえないんだろうと、絶望に涙を流してむせび泣いた。

あの時は蝶二さんが私を救ってくれた。でも今度は一人だ。

（……自立、しなきゃ）

こみあげる涙の塊を、ぐつと呑み込む。

もう、彼にすぎるのはやめよう。

転職して、ちゃんと自分で部屋を探して、
蝶二さんから離れよう。
一人でも生きていけるように。